

洗足学園音楽大学

大学院弦楽器コンチェルト研究演奏会

2022年2月19日(土) 16:00開演(15:30開場)

洗足学園音楽大学 シルバーマウンテン2階

指揮：山本 祐ノ介

【工藤 海青】ヴァイオリン：院1
J.C.バッハ／ヴィオラ協奏曲 第1、2楽章

【チョウ イチン】ヴィオラ：院2
シュターミッツ／ヴィオラ協奏曲 op.1 第1楽章

【成田 叶】ヴァイオリン：院2
W.A.モーツァルト／ヴァイオリン協奏曲第5番 イ長調 K.219 第1楽章

【菅野 稚子】ヴァイオリン：院2
チャイコフスキー／ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35 第1楽章

【高橋 沙織】ヴァイオリン：院2
チャイコフスキー／ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品35 第3楽章

— 休憩 —

【加藤 可奈子】ヴィオラ：院1
W.ウォルトン／ヴィオラ協奏曲 第1楽章

【宍戸 育実】ヴァイオリン：院1
E.ショーソン／詩曲 作品25

【濱 萌香】ヴァイオリン：院2
A.ドヴォルザーク／ヴァイオリン協奏曲イ短調作品53より第1楽章

【有馬 憧】チェロ：院2
A.ドヴォルザーク／チェロ協奏曲ロ短調作品104より第3楽章

△新型コロナウイルス感染症の感染拡大を防ぐためのお願い

- ・マスク着用の徹底、こまめな手指消毒・手洗い・咳エチケットの励行にご協力ください。
- ・大声や対面での会話はお控えください。
- ・演奏者への声援はご遠慮いただき、拍手のみとしてください。
- ・休憩時、終演後はスタッフが扉を開けるまでお待ちいただき、空いているドアから混雑を避けて入退場してください。
- ・客席内やロビーでのご飲食はお控えください。
- ・出演者への面会はできません。出演者への花束・プレゼントもご遠慮ください。
- ・万一、集団感染の発生が明らかになった際は、保健所に入場者の情報を提供する場合がございいます。

主催：洗足学園音楽大学・大学院

■ 曲目解説

J.C.バッハ／ヴィオラ協奏曲 第 1、2 楽章

アンリ・ギュスターヴ・カサドシュの贋作と言われている。カサドシュは作曲家・指揮者・ヴィオラ奏者で、自分が演奏するヴィオラ協奏曲のレパートリーを増やすために J.C.バッハの名前を借りて作曲したと言われている。今では「カサドシュ作曲の J.C.バッハ風の協奏曲」とも言われている。

(院 1 年 Va.工藤 海青)

シュターミッツ／ヴィオラ協奏曲 op.1 第 1 楽章

カール・シュターミッツは 1745 年、マンハイムで生まれる。父、ヨハン・シュターミッツはマンハイム楽派の創設者であり、弟のアントン・シュターミッツと共に、マンハイム宮廷楽団でヴァイオリン奏者として活躍した。本作品にもマンハイム楽派の特徴が多くみられ、例えば、強弱が細かく指示され、旋律に重きを置き、技巧的に書かれている。本作品は今日、多くのオーケストラの、入団オーディション等の課題曲となっている。初期のヴィオラ協奏曲の中でも非常に有名な作品で、古典派ならではの華やかで優雅な音楽に、ヴィオラの渋みのある音色が光ります。

(院 2 年 Va.チョウ イチン)

W.A.モーツァルト／ヴァイオリン協奏曲第 5 番 イ長調 K.219 第 1 楽章

ヴァイオリン協奏曲第 5 番は 1775 年、モーツァルトが 19 歳の時に作曲された。第 1 楽章：アレグロ・アペルト、イ長調、4/4 拍子。英語のオープンに相当するイタリア語アペルトを発想標語とする明るく堂々とした開始楽章。オーケストラによる主題呈示が現れた後、ソロの冒頭にアダージョが置かれる。その後再びアレグロ・アペルトとなり、オーケストラによる冒頭主題の弱奏を対旋律としてソロが新しい主題を力強く奏でる。また展開部を短調で始める、などの斬新なアイディアが駆使されている。

(院 2 年 Vn.成田 叶)

チャイコフスキー／ヴァイオリン協奏曲 ニ長調 作品 35 第 1 楽章、第 3 楽章

1874 年、当時のヴァイオリンの第一人者のレオポルド・アウアーに、チャイコフスキーはこの曲の初演を依頼したが、演奏不能と断定されてしまった。そのため、当時ライプツィヒ音楽院の教授だった演奏家のアドルフ・ブロッキーが 1881 年ウィーンで、初演をした。聴衆は反応も鈍く、批評も手厳しいものだったが、演奏したことによって、曲の真価をはっきりとみてとったブロッキーは、機会あるごとにこの曲をとりあげて演奏した。アウアーものちに前言をひるがえし、進んでこの曲を演奏するようになり、代表的な名曲の一つとして確立していった。第 1 楽章 序奏をもつソナタ形式。序奏部は第一ヴァイオリンの序奏主題からはじまり、その後独奏ヴァイオリンが登場し、無伴奏で短くカデンツァ風のアイングングの演奏をしてから、ソナタ主部に入る。のびやかな旋律の第一主題と叙述的な第二主題が演奏される。展開部はオーケストラだけで第一主題を堂々とひろげるところから始まり、途中から独奏ヴァイオリンが出て、はなやかに展開をつづける。その後のカデンツァは作曲者自身の作ったものである。展開部が終わって再現部に入る。終結部は、さらに力と速度を加え、リズム的に激しくこの楽章を終わる。

(院 2 年 Vn.菅野 稚子)

ピョートル・チャイコフスキーはロシアの代表的な作曲家で、交響曲や協奏曲、バレエ音楽など、さまざまなジャンルで傑作を残した。《ヴァイオリン協奏曲ニ長調作品 35》は、1878 年にチャイコフスキーによって作曲され、今日現存するヴァイオリン協奏曲の中でも高い人気を誇っている。本日演奏する 3 楽章は、主題はロシア風の激しく打ちつけるようなもので、ロシアの民族舞曲トレパークがもとになっている。トレパークとは、ロシア語で打ち壊すという意味の *trepac* に由来する、活発な動きをもつロシアの踊りのことである。また、メリスマという、歌詞の一拍節をこまかい音符で飾りながら引きのばして歌う、スペイン民謡の特徴も見られる。チャイコフスキーは、作曲の際、エドゥアール・ラロの《スペイン交響曲》を参考にしており、このスペイン独特の要素を自身の協奏曲に取り入れたのだと言える。今日は、踊りや民謡など、各国独特の要素を味わいながら演奏したい。

(院 2 年 Vn.高橋 沙織)

W.ウォルトン／ヴィオラ協奏曲 第1楽章

イギリスの作曲家ウィリアム・ウォルトンによるヴィオラ協奏曲は、1929年に作曲された。アバコンウェイ卿夫人クリスタベル・マクラレンに献呈されているが、作品そのものは20世紀前半を代表する名ヴィオラ奏者、ライオネル・ターティスのために作曲された。だがターティスによって拒けられたため、初演の独奏者はパウル・ヒンデミットが務めた。ウォルトンの最初の協奏曲であり、本作の作曲に当たって、尊敬するプロコフィエフのヴァイオリン協奏曲第1番を手本としている。ウォルトンの協奏曲には、ほかにヴァイオリン協奏曲、チェロ協奏曲、ピアノ協奏曲である「協奏交響曲」がある。ヴィオラ協奏曲は、ロマン派時代には今日レパートリーとなりうる作品がほとんど書かれておらず、20世紀になって復興したといえるジャンルである。

(院1年 Va.加藤 可奈子)

E.ショーン／詩曲 作品25

19世紀後半のフランスで、ワーグナーやフランクから強い影響を受け、歌曲、歌劇、交響曲、室内楽などの分野で、繊細で詩情溢れる音楽を残したエルネスト・ショーン(1855～1899年)の作品の中でも群を抜いて有名なものが、不慮の自転車事故で亡くなる3年前に書かれたこの『詩曲』である。はじめ、ロシアの文豪ツルゲーネフ(1818～1883年)の、ひとりの女性を巡る芸術家達の三角関係を描いた短編小説、『勝ち誇る愛の歌』を題材とした交響詩として着想されたが、最終的には小説の表題を取り下げ、現在の『詩曲』と名付けられた。1896年にベルギーのヴァイオリニスト、ウジューヌ・イザイの独奏で初演され、その後彼に献呈された。また1936年、この曲にバレエダンサーのアントニー・チューダーが振り付けをし、1幕のバレエ演目『リラの園』として発表している。

(院1年 Vn. 穴戸育実)

A.ドヴォルザーク／ヴァイオリン協奏曲イ短調作品53 第1楽章

ドヴォルザークの《弦楽六重奏曲》作品48と《弦楽四重奏曲》作品51を演奏したヨアヒムが彼の才能に注目し、ヴァイオリン協奏曲の作曲をすすめた。ドヴォルザークは故郷でただちに作曲に着手し、1879年7月から9月の2ヶ月間でこれを完成し、ベルリンのヨアヒムの元に原稿を携えて意見と批評を求めた。帰国後の1880年5月、意見を元に修正し、「心からの尊敬の念をもって、偉大な巨匠ヨーゼフ・ヨアヒムへ」という献辞とともに、同年ヨアヒムの元にスコアが送られた。この楽章はきわめて自由でラプソディーな形式をとっている。一種のソナタ形式とも言えるが、主題はただひとつで展開は簡潔であり、再現は極度に省略されている。ドヴォルザークは、古典協奏曲の長大な第1楽章形式の枠を破ろうと試みているともいえる。ドラマティックで勇壮なオーケストラのトゥッティに続き、ヴァイオリンが哀愁を帯びたカデンツァを奏でる。独奏ヴァイオリンが奏でる調べは、ボヘミアの郷愁を感じさせるような民族性もあり、独特の哀切を感じる魅力的な旋律で溢れている。

(院2年 Vn. 濱 萌香)

A.ドヴォルザーク／チェロ協奏曲ロ短調作品104 第3楽章

ドヴォルザークのチェロ協奏曲は正確に言うと2曲あるが、1895年のチェコへの完全帰国前後に書かれたのが、この「ロ短調」である。この曲は同郷のチェリストであるハヌシュ・ヴィハーンに捧げられているが、渡米前にドヴォルザークはこの友人とボヘミア地方を演奏旅行したこと、また、渡米後にヴィクター・A・ハーバード作曲のチェロ協奏曲第2番を聴き、チェロとオーケストラのコラボレーションに新たな可能性を見出したことがこの曲を作曲する動機を与えたと言われている。第3楽章はアレグロの自由なロンド形式の楽章で、非常に民族色が豊かである。冒頭ホルンによる活気に満ちた行進曲から、輝かしいエピソードへと次第に体系化され、それを祖国への帰還の喜びを歌うかのように、故郷の民俗的調べを主題として中間部で美しい歌に昇華している。コーダではヴァイオリン独奏による歌曲「私にかまわないで」のメロディを用い、初恋の人、ヨゼフィーナに対する追悼の念を刻み込んだと思われる。

(院2年 Vc. 有馬 憧)

■メンバー

ヴァイオリン

菅野 稚子	穴戸 育実	高橋 沙織	成田 叶	濱萌香
池原 志穂 [♪]	勝部 小夏 [♪]	鈴木 利々果 [♪]	篠崎 愛 [♪]	

ヴィオラ

加藤 可奈子	工藤 海青	チョウ イチン	古川原 裕仁 [#]
--------	-------	---------	---------------------

チェロ

有馬 憧	原 美月 [*]	大友 美侑 [*]
------	-------------------	--------------------

コントラバス

遠藤 可奈子 [*]	平木 晶穂 [*]
---------------------	--------------------

電子オルガン

稲葉 絢音	内海 菜々美	永田 凜太郎	堀田 真菜	樋口 友美
向田 真未	GUAN QI	WEI JIACHEN	DU DANYANG	JIN TINGYAN
LI MULAN	WANG QINGZI	XU HUAMIN	YAN YANGBING	ZHOU SHAOHUI

赤塚 博美[#]

♪…賛助 *…演奏補助要員 #…教員

企画・運営責任者	沼田 園子（ヴァイオリン）
指揮・チェロ	山本 祐ノ介
電子オルガン	赤塚 博美



指揮：山本 祐ノ介

両親ともに作曲家の家庭に生まれ、早くからピアノ、作曲を学ぶ。指揮を父山本直純、靱山和明、川本統脩の各氏に師事する一方、チェロを斎藤建寛、堀江泰の各氏に師事。東京芸術大学を経て同大学院を修了。ハレーストリングクアルテットのチェロ奏者、東京交響楽団首席チェロ奏者などを経て、現在ソロチェリスト及び、指揮者として活躍中。指揮者としては、京都市響、東京ニューフィル、新日本フィル、日本フィル、東京シティ・フィル、京都フィル室内合奏団、岡山フィルなどに度々招かれるほか、各地の市民オーケストラを指揮、特にファミリー向けのコンサートでは企画、編曲、指揮、司会をつとめ好評を得ている。2002年に行われた「日韓親善チェロコンサート」では、日韓300人のチェリストによる合奏を指揮、'11年開催の「チェロ・コンGRESS・イン・ジャパン（サントリーホール）」、'12年より毎年開催されている「チェロの日」等に於いてチェロアンサンブルを指揮し絶賛を博している。'11年に東京ニューフィルハーモニック管弦楽団常任指揮者に就任。また'14年には同オーケストラのメンバーからなる東京ニューフィル・ポップスオーケストラの設立に尽力、『寅さんクラシックコンサート』、『華麗なる映画音楽の世界』（民音主催）、『名画座コンサート』（朝日新聞社主催）『ゆうのすけの"名画座"コンサート』（杉並公会堂共催）などの企画で音楽界に新風を巻き起こしている。'13年にはミャンマー国立交響楽団を指揮し国立放送局制作の番組に出演。同時にミャンマー国内の盲学校やヤンゴンの日本人学校でのアウトリーチ活動を行う。以後定期的に招かれ、'14年には同オーケストラの国立劇場での公演を指揮し大好評を博す。'15年ミャンマー国立交響楽団音楽監督兼首席指揮者に就任、わずかの間にオーケストラのレベルを飛躍的に高め、高い評価を得ている。洗足学園音楽大学の非常勤講師を務める傍ら、ジュニア・フィルハーモニック・オーケストラ東京、かがわジュニア・フィルハーモニック・オーケストラの指揮者としても後進の育成にも力を入れており、2011年度香川県芸術選奨を受賞。2019年12月公開、映画『男はつらいよ お帰り寅さん』では音楽収録の指揮を務めるなど、クラシックコンサートはもとより幅広い分野で作・編曲、指揮、及びチェロ演奏を手がけているが、そのすべての活動に於いて、人々の心に安らぎと勇気を与えるため、心あたたまる表情豊かな音楽を追究している。